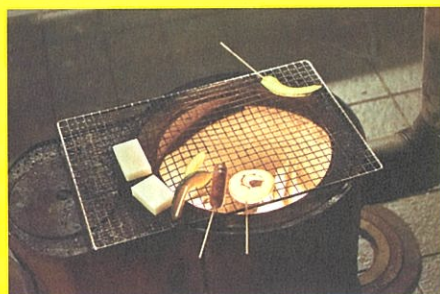




アート
ミーツ
ケア
学会

NEWSLETTER

Vol.16
2018 Summer



CONTENTS

Report 1 | 青空委員会公募プロジェクト
Report 2 | 2017年度 京都大会
アートミーツケア数珠つなぎ
2018年度 東京大会にむけて
オンラインジャーナル vol.9 発行

青空委員会 公募 プロジェクト

2016年に学会設立10年を迎え、より開かれた学会のあり方、役割を考えていくなかで生まれた青空委員会。大阪や東京で集まりを重ね、会員の交流の場にもなっていました。そして、2017年に学会初めての試みとして、青空委員会プロジェクトを公募し、3件のプロジェクトが選ばれました。今回は、それぞれの取り組みについてお聞きます。

青空委員会とは

会員参加による研究や協働のプロジェクトが推進されることをめざし、プロジェクトの企画・運営を行うための委員会です。会員により構成されます。委員会は固定的なものではなく、会員からの発起により随時立ち上げることが可能です。

インクルーシブリサーチの手法を応用した アートの生き方探究

Q1 プロジェクトの概要を教えてください

「インクルーシブリサーチ」とは、その場にあつまった人が、おたがいのちがいと関心を知りあいながら、ともに探究をすすめる試みです。「ジョイアスクールつなぎ」で学んでおられる野村順平さんによる「自販機についての研究」のご発表から出発して、あるひとの関心をわたしたちがどのように理解し、そこからともになにかを探究するプロセスがどのようにうまれるのか、を京都大会のワークショップで考えてみました。

Q2 プロジェクトを通して実現したかったことは？

「リサーチ」は、本来だれでも機会さえあればできることであり、その多様なあり方が認められるものです。学術調査だけで



ワークショップ後半

「自販機についての研究」から考えたことについて、みんなで話しあう

ほんまなほ

大阪大学COデザインセンター

協働メンバー

谷美奈 帝塚山大学全学教育開発センター

森口弘美 京都府立大学公共政策学部福祉社会学科



はない、より柔軟で多様な、だれでも参加できるリサーチのあり方を模索し、それらのあいだにネットワークをつくることこそが、全体としてのリサーチの質を高めていくものであることを示したいとおもいました。

Q3 このプロジェクトで、新しいつながりが生まれたり異なるものが「ミーツ」したりしましたか？

ワークショップを通して、「ジョイアスクールつなぎ」のみなさん、野村さんのご家族のあいだにもあらたな気づきが生まれるなど、ひとの関心（そしてその「ふしぎさ」も）を知ることでこの世界の豊かさ、わたしたちの〈あいだ〉に生まれる豊かさに、すこしですが、目を向けることができたとおもいます。

Q4 今後の展開や展望があれば教えてください

こうしたリサーチの「間口」をひろげることで、さまざまな問題の当事者たちがリサーチによって、じぶんたちのくらしを豊かにしていけるとともに、そうしたリサーチを「評価」するのではなく、たがいのリサーチではみえないことを補いあう、対話的なリサーチのネットワークがうまれることをねがいます。

Q5 アートミーツケア学会、青空委員会に要望があれば教えてください

従来のアカデミックなリサーチに偏らない、もっと自由な研究発表の場をつくっていきましょう！

アートにまつわる「書く・グラフィー」を考える

——実践者としてアートの実践を書くことの意味と可能性

Q1 プロジェクトの概要を教えてください

人とアートでかかわる現場に身を置いていると、その取り組みの意味が何となくわかっている気持ちになります。言葉で伝えようとするとうまく言い表せないことが多いのではないのでしょうか。そこで、美術、演劇、詩や教育哲学、コミュニティにかかわるアートの実践を「書く」事例と参加者との対話を通して、書くことの目的や方法、見えてくる実践理解と他者理解、実践者の力量形成について考えを深める機会をもちました。

Q2 プロジェクトを通して実現したかったことは？

アートの実践を「書く」目的や考え方、具体的な方法などを共有することで、実践を捉え直したり、表現する言葉を選ぶことで活動や体験の実感や意味を見出していく可能性を感じてもらい、自分たちの取り組みについて活動と言葉のあいだを行き来しながらその意味を考えてみることを少しだけ後押しできればと思いました。

Q3 このプロジェクトで、新しい

つながりが生まれたり異なるものが「ミーツ」したりしましたか？

アートだけでなく福祉や教育など様々な実践者や研究者が集まり、領域間に溝があること、分野や職業を横断することの難しさ、アートは非言語領域を表現するためにはあるのでは、と言った意見があり、それに対して「書く」ことが溝を埋め、異なるものをつなぐのではないかといった意見が「ミーツ」し、アートと「書く」ことの可能性が広がりました。

Q4 今後の展開や展望があれば教えてください

発表内容を基にしたエッセイをまとめてもらい、アートと「書く」ことにまつわるアートグラフィー(A/r/tography)の論考をまとめた本の出版を準備しています。また、アートの実践を事後的に書くだけでなく、表現や探求が書くこととともに広がり、深まっていくことを試みるようなワークショップも開催したいと思っています。

笠原広一

東京学芸大学 | 芸術教育

協働メンバー

高尾隆 東京学芸大学 | 演劇教育、吉田梨乃 東京学芸大学大学院博士課程

岩田さや子 東京学芸大学大学院修士課程、春野修二 お創造屋 | ハルハウス

中村翔太郎 小学校教諭、森本謙 ICU 修士修了 | 教育哲学



後半の話し合いの内容が書かれた黒板

Q5 アートミーツケア学会、青空委員会に要望があれば教えてください

今回のセッションではお世話になりました。「これを皆さんと考えたい！」と思った時から実施まで短期間で実行に移せました。こうしたチャレンジを後押ししてくれる学会、青空委員会のサポートは素晴らしいかったです。ぜひこの取り組みを継続させ、多くの方にホットな議論やプロジェクトを提起してもらえたらと思います。

聾／聴の境界をきく

——言語・非言語対話の可能性

Q1 プロジェクトの概要を教えてください

聾者／聴者／CODA (Children of Deaf Adults | ろう親をもつ聴の子ども)、異分野アーティストの「協働」のかたちをキーワードの「境界」から探りました。まず前半は、メンバーの相互理解を内側の対話から深め、それぞれの専門性がサウンドスケープのように響き合う場を目指しました。後半は、①聾／聴の表現者や手話学習者が対象のリサーチ、②大学との「哲学カフェ」連携、③一般参加型ワークショップと段階的に「境界」をひらき、活動の継続性や発展性を見据えました。



第2回境界リサーチ「カラダ | 音 | コトバ」
「手話通訳のある対話」@アーツ千代田3331 2018/03/21

Q2 プロジェクトを通して実現したかったことは？

聾／聴にある「境界」の豊かさや可能性、「障害のある・ない」「サポートする・される」とは違う関係性を、芸術の内側から提示したいと思いました。手話通訳を含む「情報保障」や「アクセシビリティ」の在り方もメンバー間で検討しました。

Q3 このプロジェクトで、新しいつながりが生まれたり異なるものが「ミーツ」したりしましたか？

聾／聴／CODAの世界、異分野アートが「ミーツ」する異文化・異言語交流の場でした。さらに活動を通して聾／聴の表現者や研究者、手話学習者と出会いました。一方で、筆者を含む多数派の聴者が聾者や「ろう文化」と対峙するとき、一方的かつ包摂的な「ミーツ」に陥らない意識も不可欠だと思いました。

Q4 今後の展開や展望があれば教えてください

メンバーとは緩やかにつながりながら、ワークショップや対話型イベントを継続していく予定です。情報はSNS専用ページやサイトをご覧ください。

・Facebook「聾／聴の境界をきく」

<http://www.facebook.com/Deaf.Coda.Hearing>

ササマユウコ

〔聴〕音楽家・CONNECT／コネクト代表

協働メンバー

零境〔聾〕舞踏家、米内山陽子〔CODA〕劇作家・舞台手話通訳



・芸術教育デザイン室CONNECT／コネクト

<http://coconnect.jimdo.com/>

Q5 アートミーツケア学会、青空委員会に要望があれば教えてください

研究者だけでなくアーティスト企画のプロジェクトにも助成を頂けたことでメンバーの協力・理解が得やすく、よい意味で緊張感と使命感をもって活動に取り組むことができました。心よりお礼申し上げます。要望は「手話通訳」「要約筆記」「UDトーク」等の導入（希望があった場合）です。



聾／聴をつなぐ非言語の身体ワークショップ

Report 2

2017年度京都大会

日時 | 2017年12月15日(金)ー17日(日)
会場 | 京都市立芸術大学、京都芸術センター
主催 | アートミーツケア学会
共催 | 京都市立芸術大学



基調体操



「不意の味」茶会

大会を終えて

岸本光大

「状況のアーキテクチャー」プログラムコーディネーター

2016年より京都市立芸術大学では、アートと他領域が会うことで生まれる可能性について探るプロジェクト「状況のアーキテクチャー」において、いくつかの実験的な活動を進めてきました。この度はご縁があり、ホスト校として運営に携わるだけでなく、学会にて私たちの活動の成果を発表させていただきましたことを大変嬉しく思っております。参加型パフォーマンスの「基調体操」や、京都市立芸術大学とたんぽぽの家との協働によって実現したライブパフォーマンスなどの

背景には、持ち合わせの概念や経験のみを頼りに予定調和へ向かうのではなく、よく分からない状況へ敢えて身を置き、まずはそこにあるものを受け入れ、またそれによって未だ見えなかった何かを発見し、共通の理想郷について思い巡らすキッカケとなる場を用意することはできないだろうか……という思いがありました。至らない点も多々ありましたが、学会員みなさま、学会事務局みなさまをはじめ、京都大会にご参加いただきました全ての方に改めましてお礼申し上げます。



パネルディスカッション



ライブパフォーマンス

アートミーツケア 数珠つなぎ 全国で活動する会員のみなさんをご紹介します!



SAL 復興支援アートプロジェクトでの視察
(福岡県朝倉市黒川、2018年) 撮影 | 清東節江

東日本大震災後の音楽やアートを通じた復興支援活動、地域再生とアートプロジェクトなどのテーマに取り組んできました。2015年以降は、九州大学ソーシャルアートラボ (SAL) をベースに活動を展開。現在は、主に社会包摂に関わるアートのあり方とその評価に関する研究 (文化庁との共同研究) に取り組んでいます。

中村美亜

東京藝術大学卒業後、アメリカのミシガン大学大学院などで音楽学や文化研究、ジェンダー／セクシュアリティについて学ぶ。帰国後、HIV/AIDSやセクシュアル・マイノリティの啓発支援活動に関わった後、芸術とケアを結ぶ研究に携わるようになる。2014年より九州大学大学院芸術工学研究院准教授 (芸術社会学)。単著に『心に性別はあるのか?』(2005)、『クィア・セクソロジー』(2008)、『音楽をひらく』(2013)、編著に『ソーシャルアートラボ』(2018) など。



芸術活動によるエンパワメントや社会変容の仕組みに関する研究、また、その知見をいかした文化政策の提案を行っています。特に人が生きていくために行う表現、マイノリティとマジョリティの関係性に変化を及ぼす表現やコミュニケーションに興味があります。

この10年間では、セクシュアル・マイノリティの音楽活動、



原寸大模型を使ったワークショップ／筑波メディカルセンター病院 (2017年)

学生時代から筑波大学附属病院でのアート活動に参加。その後、筑波メディカルセンター病院のアート・コーディネーターとして、医療者と作り手を繋ぐ役割を務めてきました。

活動を通して、医療福祉の環境を改善するためには、調査や職員との対話を通して本質的な課題や潜在的なニーズに向き合うこと、創造的な解決方法やアイデアによって形にすること、職員・利用者・アーティスト・地域の方・企業など、様々な人が協働して改善に取り組むことができる場や枠組みが必要だと感じるようになりました。こうした想いをかたちにするために、2017年にNPO法人チア・アートを設立したばかりで、毎日奮闘しています。

岩田祐佳梨

2016年 筑波大学大学院博士後期課程修了、博士 (デザイン学)。2011年より筑波メディカルセンターアート・コーディネーターとして勤務。現在、NPO法人チア・アート理事長。東京工芸大学建築学科助手。日本工業大学生活環境デザイン学科非常勤講師。



2018年度 東京大会にむけて 発表募集しています！詳しくは学会ウェブサイトまで

アートを計測する ——エビデンスってなに？

山野雅之 東京大会実行委員長（女子美術大学教授）

2018年度アートミーツケア学会東京大会は、11月3日から11月4日までの期間、女子美術大学杉並キャンパスで開催致します。

女子美術大学は、女性に対して高等教育機関における美術教育への門戸が開かれていなかった明治33(1900)年に、女子専門の美術教育をおこなう学校として創立しました。女子美術大学では1992年から、病院や介護福祉施設を中心に、アートの設置による心の安らぐ空間づくりを目的としたヒーリング・アートプロジェクトに取り組んできました。更にヒーリングを探究する教育を実践する為、2010年杉並キャンパスにアート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域を開設しています。

昨今、医療・福祉施設、コミュニティーなど社会的課題が横たわる現場において、様々なアプローチによってアート活動が実践されていますが、それらを継続して実施して行く為には、運営資金の確保や活動の人的な引き継ぎ等切実な問題を抱えているのが現状です。多様な現場で如何にアート活動を継続させ、経験と実績を重ねていくことが出来るか。アートの存在がケアにつながる大切なもので



世界のバリアフリー児童図書展 in 女子美



次世代ユニバーサルアートイベント2018
「吹き出す！×フキダシ！」

あり、その事が当たり前であると認識される社会にしていく方法とは。アート活動の効果をどのような方法で分析、データを数値化することで、人々の納得するエビデンスが得られるのか。またエビデンス自体が本当にアート活動にとって必要なものなのか云々。

今年度の大会は「アートを計測する——エビデンスってなに？」というテーマで、社会的課題が横たわる現場に働きかけるアート活動に対する評価指標のあり方について、問題提起や議論を創出する場にしたいと考えています。

アートミーツケア学会 オンライン ジャーナル

学会のジャーナルは第4号からオンライン化し、ウェブサイトで公開しています。ご覧になれない方は送付いたしますので事務局までお知らせください。

第9号を発行しました

【研究ノート】

女性障害者の美容に関する意義：
インタビューから見る個々に異なるバリアフリー
松尾まどか NPO法人美容本舗 harmony 理事長・美容師

ゼミ活動におけるデザインによる
過疎地域の寺院問題への取り組み
広根礼子 金沢学院大学 芸術学部 芸術学科

検診場における造形ワークショップによる場づくり
羽賀文佳 東北芸術工科大学大学院 芸術教育研究領域 2012年修了

空間的療養効果を重視した Art in Hospital 風の家
《Breathing House》

定廣和香子
札幌市立大学看護学部、札幌市立大学 DXN Art in Hospital プロジェクト
山田良
札幌市立大学デザイン学部、札幌市立大学 DXN Art in Hospital プロジェクト

第10号 投稿案内

会員のみなさまから「論文」、「実践報告」、「研究ノート」を募集いたします。奮ってご投稿ください。詳しくはアートミーツケア学会ウェブサイトをご参照ください。

締切 2018年9月20日(木)

発行予定 2019年3月



アートミーツケア学会 入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1 大会の開催

講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。

2 調査研究の推進

「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。

3 学会誌の発行

アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。

4 ニュースレターの発行

日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。

5 フォーラム、シンポジウムの開催

特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

6 プログラムの開発、プロジェクトの実施

ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

7 国際交流の推進

アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関する国際的なネットワークの形成をめざします。

申し込み方法

- 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先 アートミーツケア学会
口座番号 00920-4-252135
- ご住所、電話番号、お名前、会員種類をご記入のうえ、年会費の払込票(コピー可)をそえて事務局までお送りください。
- 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

会員種類・年会費

個人会員 一般10,000円 学生5,000円
賛助会員 30,000円

役員(敬称略)

会長

鷲田清一(京都市立芸術大学理事長・学長、せんだいメディアテーク館長)

副会長

中川真(大阪市立大学都市研究プラザ特任教授)

森口ゆたか(美術家、近畿大学文芸学部教授)

常務理事

播磨靖夫(一般財団法人たんぽぽの家理事長)

理事

秋田光彦(浄土宗大連寺・應院住職)

奥村伸二(社会医療法人同仁会耳原総合病院病院長)

笠原広一(東京学芸大学教育学部准教授)

坂倉杏介(東京都立大学都市生活学部准教授、三田の家LLP代表)

関口怜子(ハート&アート空間ピーアイ代表)

ダーリング・ブルース(美術史家)

銅金裕司(メディアアーティスト、京都造形芸術大学教授)

中村美亜(九州大学大学院准教授)

並河恵美子(認定NPO法人芸術資源開発機構代表理事)

野津亮(大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科准教授)

野呂田理恵子(女子美術大学准教授)

日野陽子(京都教育大学准教授)

ほんまなほ(大阪大学COデザイン・センター／文学研究科准教授)

水野哲雄(京都造形芸術大学名誉教授)

見寺貞子(神戸芸術工科大学教授)

三輪敬之(早稲田大学名誉教授)

山口(中上)悦子(大阪市立大学大学院医学研究科医療安全管理学准教授)

横川善正(金沢美術工芸大学名誉教授)

監事

田中みわ子(東日本国際大学准教授)

桒仲江(株式会社ダブディビ・デザイン代表取締役)

編集後記

昨年度の京都大会では、多くの方にご協力いただきありがとうございました。交流の輪があちこちでできていたのが印象的でした。さて、ガラリーとデザインが変わったニュースレター、ぜひご感想などお寄せください。(中島香織)

今年は久しぶりの東京での大会です。ホスト校となる女子美術大学のみなさんが出会いと交流がたくさん生まれるような場づくりを考えてれています。楽しみです！(森下静香)

今年5月に事務局に入りました。このニュースレターを編集しながら本学会の活動の全貌を何とかつかみたいと思っている最中です。11月の東京大会は会員の方々と実際にお会いできるまたとない機会。楽しみにしています。(後安美紀)

アートミーツケア学会 ニュースレター Vol.16

2018年8月25日発行

発行 | アートミーツケア学会

<http://artmeetscare.org/>

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

一般財団法人たんぽぽの家内

Tel. 0742-43-7055

Fax. 0742-49-5501

E-mail. art-care@popo.or.jp

デザイン | 長岡綾子(長岡デザイン)